

縄文時代後晩期における 剥片石器石材について —尾張・三河地域の剥片石核類から—

● 川添和暁

本稿は、剥片石器石材を論じるため、剥片石核類に焦点を当てて概観したものである。原産地および流通経路などの研究が進む下呂石・サヌカイト・黒曜石・設楽安山岩（只持安山岩）などを取り上げ、残存法量および剥片作出の様子などを観察した。その結果、縄文時代中期後半の黒曜石で見られる現象に対比して、縄文時代後期中葉頃では、特定遺跡において、各種石材の剥片・石核が大型の石塊として遺跡内に残される事例があることを指摘した。また、下呂石角礫の剥片については、縄文時代晩期前半を中心として石鏃製作とは無関係に剥片がもたらされている事例も明らかにした。

1. はじめに

この東海地域では、縄文時代以来の土器研究において、平素から小地域の様相差の議論がなされている（久永 1972、増子 1975 など多数）。このことは、当地域をフィールドにする研究が、社会集団や活動・移動の研究において、詳細な分析を可視的に行うことができる、魅力的かつ大きな可能性を有していることに他ならない。

一方、縄文時代以降の石器を見てみると、特に剥片石器においては、同一器種で、あるいは複数器種をまたいで、多様な石材が使用されていることに気づかされる。但し、時代を通じて各石材の比率には変化が認められるようである。縄文時代の石器研究においては、縄文土器研究との比較が大前提として必須となる。換言すれば、縄文土器研究に対して提言できる石器研究が望まれよう。

近年、多様化する石器研究のなかであって、石器とその使用石材との関係は、議論が活発である。このことは、素材獲得から製作・使用・廃棄（埋納）と、遺物の一貫して考える、ライフサイクル論的な考察を行う際の出発点となる。但し、地質学および岩石学的な知識が多分と必要となることも事実で、筆者の力量の及ぶところは極めて限定的である。

本稿は、以上の一環として、実際に遺跡から

出土している剥片石器の中で、剥片石核類の様相について論じるものである。

2. 研究小史

石材の研究としては、澄田正一らの研究をまず取り上げたい（澄田 1967）。この研究では、諏訪兼位・宮田邦彦らとともに、岩石のプレパラートを作成して、サヌカイトの顕微鏡写真を提示している。その際、一宮市元屋敷出土の下呂石についても比較資料として同様の写真を提示した上で、黒雲母安山岩として紹介した。

当地域の石器石材について、本格的に系統立った分析を行ったのは、小島 隆であろう。小島は三河地域においての遺跡別に石鏃使用の石器石材の分析を通じて、使用石材の組成を提示した（小島 1993）。また、その後、石材別に比率を提示し直して、いわば地図上に等高線図のような分布濃度を示し、搬入ルート of 推定を提示した。小島の研究において注目すべきことに、三河地域産出の石器石材研究がある。特に、設楽安山岩（只持安山岩）の提唱は、最大の業績である（小島 1995・2003）。

三河地域の石材としては、いわゆる白色風化石材といわれる石材がある（小島 2001）。最近、新城市萩平遺跡出土資料の分析では、溶結凝灰岩・凝灰質頁岩・ヒン岩などが含まれるという（中村・堀木・川合・平井 2016）。

下呂石に関しては、さまざまな名称で言われていたものを、飛騨考古学会の石原哲彌によって下呂石として提唱された経緯が知られているが(石原 1981)、尾張・三河地域での出土様相を全面的に明らかにしたのは、齊藤基生である(齊藤 1993・1994・2002)。齊藤は、実際に飛騨川・木曽川で採取できた円礫を通じて粒径や摩滅度を検討して、石器石材として流通した下呂石円礫の採集地点を推定し、さらに円礫・角礫とでは、流通ルートが異なることを示すなど、大きな成果を残した。田部剛土は遺跡から出土した下呂石の円礫・角礫の出土様相を検討して、地域を小地域に区分した上で、石材流通ルートの推定を行った(田部 2001)。中村由克は齊藤の成果を用いて下呂石礫面の地質学的記載を行い、その解析から採集地点ごとの特徴を表した(中村 2007)。

矢作川流域では、打製石斧・刃器・礫器などに主体的に使用されている石材について、根羽石と提唱して、設楽安山岩との対比で製作対象となった剥片石器について検討した平井義敏らの業績が注目される(平井・藤根・竹原 2013)。この石器石材を含めた大型剥片石器における研究が進展すれば、小地域集団の様相差をとらえる一指標となる可能性があり、筆者は今後も注目すべきと考えている。

本稿では、各遺跡における剥片・石核(一部楔形石器や原石を含む)の出土様相を提示することによって、各小地域における剥片石器石材の様相について概観することとする。

3. 各石材の様相

ここでは、縄文時代後晩期に焦点を当て、主に石鏃・石錐・石匙・スクレイパー・使用痕剥片などに対応する石器石材について取り上げていく。かつて筆者は、尾張東部丘陵部から名古屋台地にかけての遺跡から出土した該当器種に対して、石材別に各器種の法量散布傾向を概観したことがある(図 1)。器種により、要件とされる法量に相違があることが一目瞭然である。また、縄文時代晩期を中心とする名古屋市守山区牛牧遺跡では、石鏃使用石材の主体は下呂石であったものが、石匙・スクレイパーにな

ると下呂石使用の比率が低下する傾向も認められた。この要因の一つは、石匙・スクレイパーが、石鏃より大きな法量の素材剥片を要件とする事情になるものであろう(川添 2011b)。

図 1 に取り上げた石材の中で、本稿では、黒曜石・下呂石を中心に、さらにサヌカイト・設楽地域の石材について、若干述べていく。なお、今後も石材流通動向を追求すべきチャートに関しては別の機会に行うこととする。

a. 各石材についておよび縄文中期以前の様相

以下、ここで扱う石器石材について、簡単に述べておく。

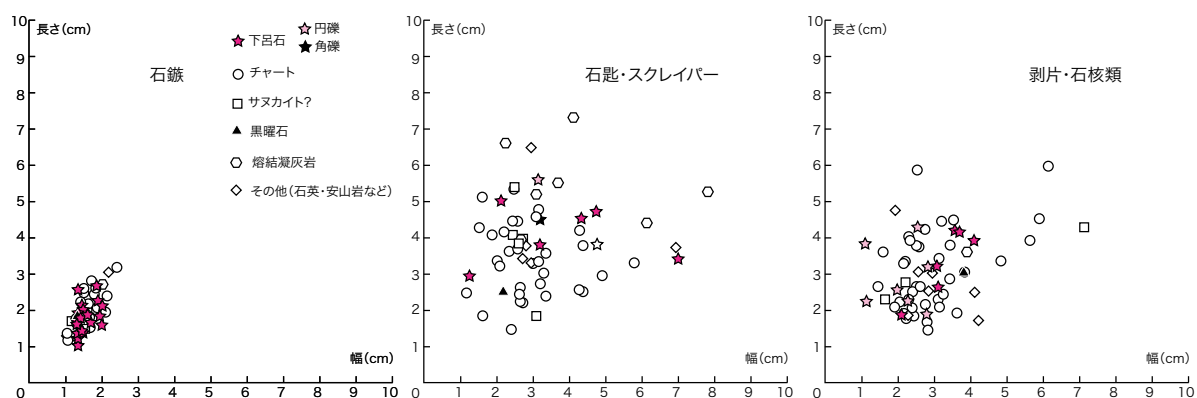
下呂石 下呂石は、下呂市湯ヶ峰で産出される流紋岩である(岩田 1995)。先に述べたように、石材流通の問題に関しては、飛騨川・木曽川の河原各地点から採取される円礫と、原産地から陸路で運ばれる角礫とでは、流通経路が異なる。瀬戸市上品野遺跡で台形様石器あるいはナイフ形石器にも使用されるなど(川添編 2005)、後期旧石器初頭段階からすでに使用されていたようである。また、上品野遺跡では、下呂石円礫の石核も出土していることから、角礫・円礫ともに後期旧石器時代以来から使用されていた。

黒曜石 黒曜石は、瀬戸市上品野遺跡・岡崎市西牧野遺跡・設楽町半場口遺跡・豊川市駒場遺跡などの、後期旧石器時代以降、一宮市猫島遺跡・豊田市川原遺跡と、弥生時代中期に至るまで、継続して使用された石器石材であり、決して古い時期のみに使用された石材ではない。

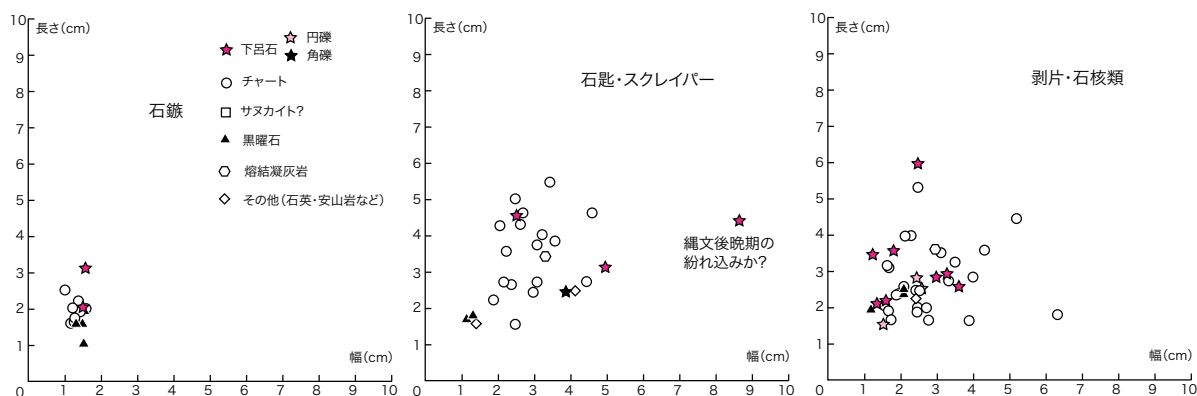
蛍光 X 線分析の行われている資料のみで言及すると、原産地は星ヶ塔産が多く、小深沢・神津島産も若干認められる(建石・二宮 2013)。

サヌカイト 下呂石とともにサヌカイトの利用は、東海地域でもかなり比率が高い。原産地としては二上山産が多いようであるが、金山産もある程度流通しているようである。後期旧石器時代初頭の上品野遺跡や縄文時代早期の瀬戸市八王子でもサヌカイトの利用が認められる。

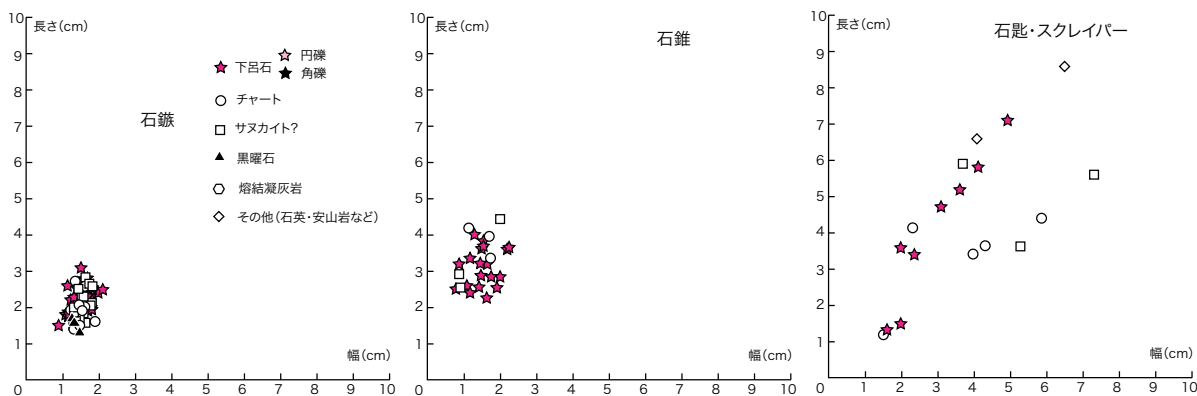
設楽安山岩(只持安山岩含む) 東三河産の地元石材で、薄くかつ長い剥離がとれる性質を有する。褐灰色から白色気味の色調を呈することもこの石材の特徴である。豊田市川原遺跡など、弥生時代中期後半の石鏃の中にも、ある一



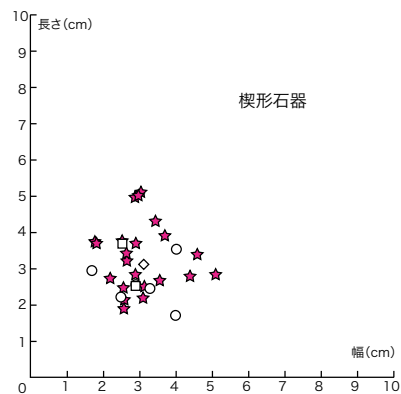
八王子(瀬戸市) 縄文時代早期後半



吉野(瀬戸市) 縄文時代中期後半～後期初頭



牛牧(名古屋市長山地区) 縄文時代後期後葉～晩期



牛牧遺跡における石器群と使用石材との関係				
	石鏃	石錐	使用痕剥片	石匙・スクレイパー
下呂石	●	◎	○	○
チャート	○	○	○	○
サヌカイト	○	○	○	○
黒曜石	△			
熔結凝灰岩	○	○	○	○

図1 尾張東部丘陵部から名古屋台地にかけての石器器種別法量散布図(川添 2011b より一部改変)

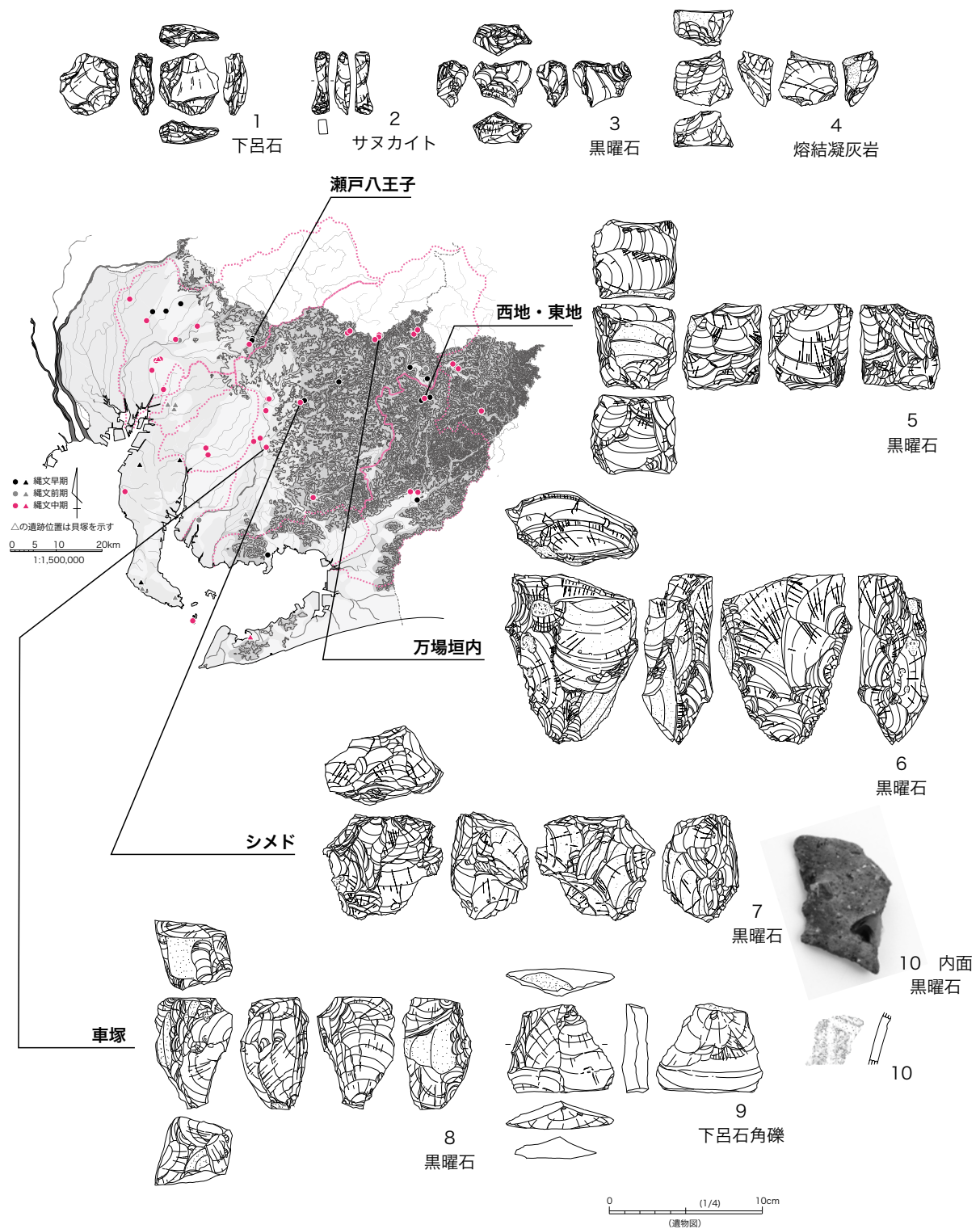


図2 縄文時代早期・中期における主要な剥片石核類

定量の使用が認められている（川添 2015a）。

熔結凝灰岩あるいは凝灰岩 いわゆる白色風化石材と言われている石材も含む。後期旧石器時代から縄文時代早期までは、西三河地域や尾

張東部丘陵地域でも多く認められる。遺跡出土資料を観察すると、珪質が強く表面が滑らかなものから、風化のためであろうか、表面のざらついたものも認められる。

設楽安山岩以外の石材について、瀬戸市八王子遺跡出土の資料（石核）を図2の1～4に提示した。2は短軸が著しく短くなっているが、いずれも長軸5cm弱で残存している。いずれも各面で1回から複数回にわたり、長軸3～4cmほどの剥片が作出されている。剥片石器の中でも石鏃などに対応しているものであろう。

b. 縄文時代中期（中期後半中心）

縄文時代後晩期の比較として、縄文時代中期後半の黒曜石を中心とした石材動向が好例である。ここではその顕著な事例を提示した（図2）。

5は、設楽町西地・東地遺跡出土資料で、法量5.6×5.2×5.2cm、重量218.5gである。正方形ブロック状を呈するこの石核からは、最大で4.9×4.0cmの剥片が作出されたようで、打面を転移させながら、一面ごとに剥片が作出されたと考えられる。中期後半の竪穴建物跡が3棟検出された脇で出土したもので、これも当該時期に属するものである。

6は豊田市旧旭地区の万場垣内遺跡出土資料である。法量11.1×8.7×4.9cmを測り、重量381gである。図面上端は一撃が加えられており、剥片作出あるいは切断が行われたものと考えられる。資料を観察すると、表裏および側面に礫面の残存が確認でき、本来の原石の大きさも、現況の大きさと著しく異なることはないようである。確認されうる最大で3.7×3.6cmの剥片が作出されている。第1号地点の第1号竪穴建物跡の床面直上から出土した。

7は同市足助地区のシメド遺跡出土資料である。法量は7.9×6.9×4.4cm、重量216.2g以上である。図面で裏側にした面は、ほぼ礫面であり、剥片作出が行われたのは、図面での上面と表面が主体である。上下打点を変えて、確認されうる最大で3.3×2.5cmの剥片が作出されている。この資料は、剥片4点との接合資料であり、いずれもA区竪穴建物跡内から出土した。

8は岡崎市車塚遺跡出土資料である。法量は7.2×5.0×4.6cm、重量156.8gである。各面で打点を転位させながら剥離を行っており、最大5×4cm程度の剥片が作出されている。9は下呂石角礫の大型剥片である。図面上部側に礫面が残存するもので、法量6.9×5.7×1.8cm、重量58.5gを測る。現状は平面台形状を呈しているが、中

位で切断され、縁辺部が欠如している。8・9は掘立柱建物跡の同一ピット柱穴跡部分に入れた状態で出土した。また、これらとは別に車塚遺跡では、1cm×1cm程度の法量の剥片が土器に貼り付けられた状態で見つかった（10）。この土器片は土器敷炉跡に使用されたもので、中期後半の島崎Ⅲ式から山ノ神Ⅰ式と考えられ、土器自体は決して遠隔地からの搬入品ではない。

なお、蛍光X線分析による産地推定が行われている6～8・10は、いずれも星ヶ塔産とする分析結果が出ている（建石・二宮2013、池本編2015）。

このように、縄文時代中期後半には、黒曜石が大きな塊の状態で遺跡内に持ち込まれている事例が、矢作川流域で複数例あることが明らかとなった。これらは大きな塊であることを意識して遺構内などに入れられたと考えられ、同様な事例は、今後、豊川流域でも見つかるかも知れない。また、車塚遺跡の事例から、下呂石角礫にも同様の意味を持たせていた場合があったかもしれない。縄文時代中期においては、刈谷市芋川遺跡において下呂石角礫が2点確認されているとのことである（小島1994：6～7頁）。今回、この資料を確認し得ていないものの、単に石器石材として下呂石角礫素材の流通が碧海台地南側にも達していたとするのか、石器石材以上の何か意味合いを付加させられているものなのかは、今後も検証が必要であろう。

c. 縄文時代後期前葉～中葉（後期中葉中心）

縄文時代後期初頭から中葉の様相を概観する。図3には、下呂石およびサヌカイトの剥片石核類の中で特徴的なものを集めた。11～16は下呂石、17・18はサヌカイトである。

11は瀬戸市内田町遺跡出土の接合資料で、八王子式期を中心とする後期中葉頃の資料と考えられる。調査では、包含層中から下呂石剥片が3片かたまって出土したとされ、そのうちの2片が接合する。接合後の法量5.90×4.90×4.75cmである。実見しえていないものの、下呂石角礫の可能性がある。

12・13は瀬戸市大坪西遺跡の出土資料で、いずれも下呂石円礫である。これらが出土した01A区は西北出式を主体とする土器がまとまっ

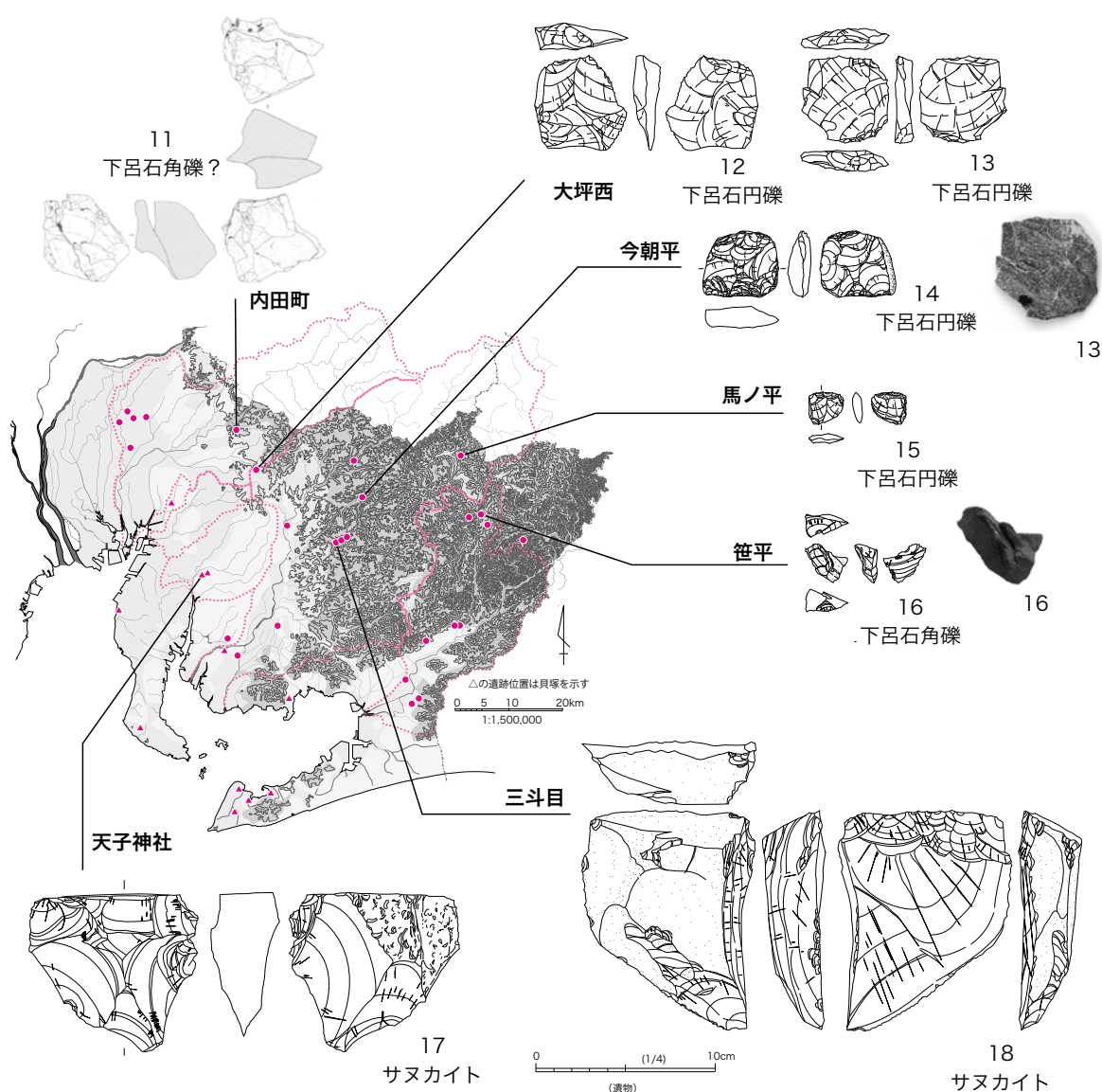


図3 縄文時代後期中葉頃の主要な剥片石核類（下呂石・サヌカイト）【写真は縮尺不同】

て出土している。12は法量 $5.2 \times 5.1 \times 1.5$ cm、13は $4.8 \times 4.8 \times 1.0$ cmの法量を測る。

14は豊田市旧足助町の今朝平遺跡出土資料で、下呂石円礫である。法量 $4.2 \times 3.7 \times 1.3$ cmを呈するもので、両極による剥片作出が行われ、さらに90度打面を転移させて継続して行われた。当遺跡は、配石遺構といわれるものの時期が西北出式期といわれるが、この資料はより後出するものかもしれない。

15は豊田市旧稲武町の馬ノ平遺跡出土資料で、下呂石円礫である。 $1.9 \times 1.8 \times 0.5$ cmの法量を測る剥片で、無茎鏃に対応する素材剥片である。

16は設楽町笹平遺跡出土資料で、下呂石角

礫の剥片である。 $2.2 \times 2.0 \times 1.2$ cmの法量を測る。90度の打面転移を行いながら剥片が作出された。

17は刈谷市天子神社貝塚出土資料で、サヌカイトの大型剥片石核である。法量 $9.4 \times 8.8 \times 3.8$ cmを呈するものである。表裏の両面とも周囲から剥片が最大 5.2×8.4 cmの剥片が作出されている。

18は豊田市三斗目遺跡出土資料で、法量 $12.2 \times 9.6 \times 3.5$ cm、重量480gの、サヌカイトの板状素材礫である。三河内陸部で出土するサヌカイト剥片石核類の中で、最も法量が大いものである。なお、この三斗目遺跡では、下呂石円礫の剥片石核類のみならず、 $6.43 \times 4.38 \times$

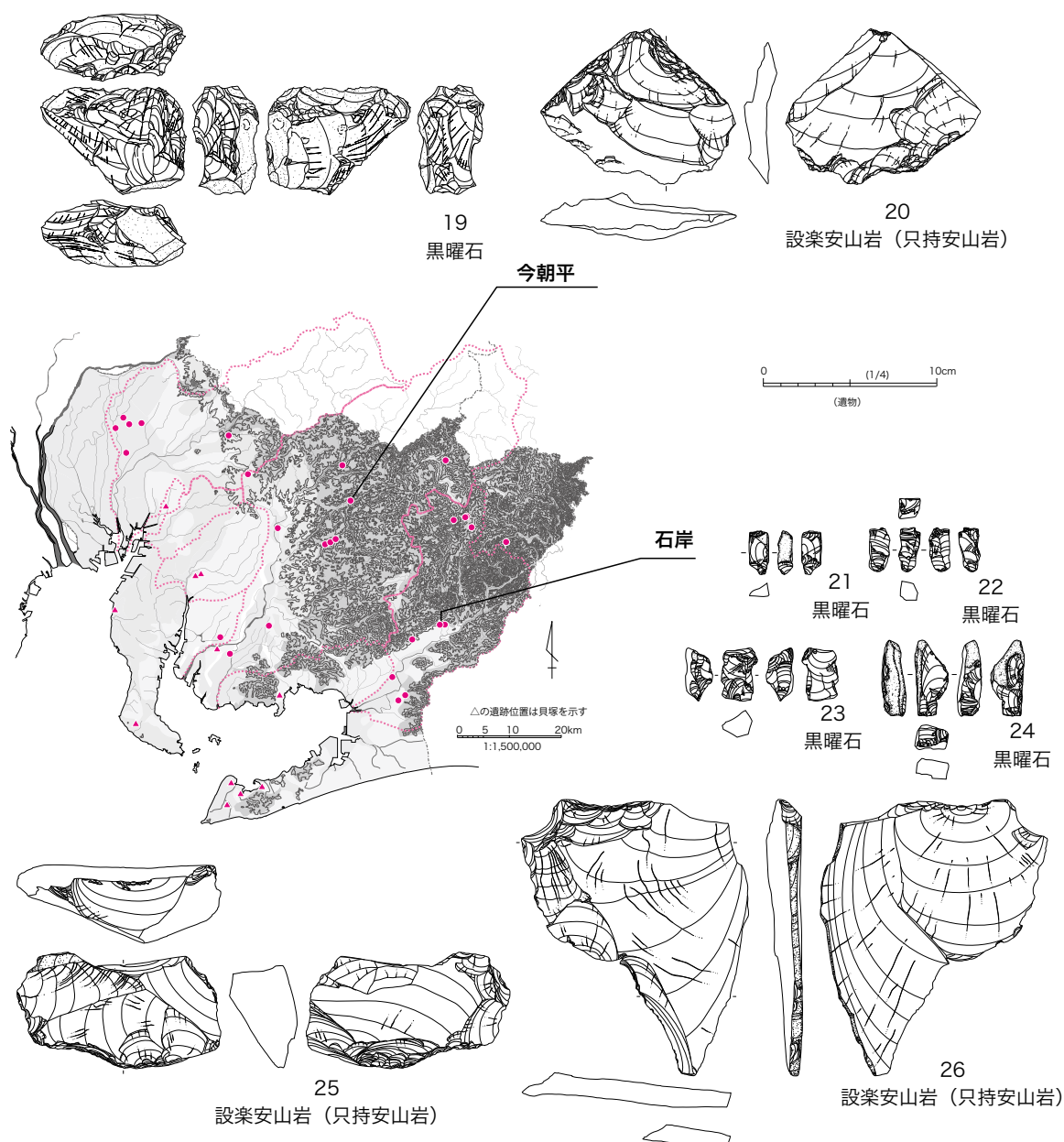


図4 縄文時代後期中葉頃の主要な剥片石核類（黒曜石・設楽安山岩）

3.34cm ほどの下呂石角礫の石核も出土している（余合編 1993）。

なお、北設楽地域においては、法量の大きい状態でのサヌカイト剥片石核類の出土は現在までのところ確認されていない。豊川水系流域と矢作川水系流域では、サヌカイト石材の流通の様相が異なるかもしれないが、今後の調査により出土する可能性は十分考えられる。

黒曜石と設楽安山岩の剥片石核類について、後期中葉西北出式を中心とする豊田市旧足助町の今朝平遺跡資料と、後期中葉八王子式期を中

心とする新城市の石岸遺跡出土資料を提示する（図4）。まずは黒曜石について見てみよう。石岸遺跡は、後期中葉八王子式期を主体とする遺跡であるが、径5cm以下の小型の原石が搬入されたものと考えられる（21～24）。一方、異彩を放つのは、今朝平遺跡出土資料である（19）。この資料は、1号配石といわれる遺構内から出土したもので、石器作業台とされた巨大な台石脇からの出土である。法量は8.5×6.2×3.8cmを測り、重量169.8gである。周囲は礫面のままで、図面で正面にした面のみに敲打されたよ

表1 縄文時代後期中葉を主体とする遺跡出土の剥片石器および使用石材点数

器種 遺跡名	石 鏃 (無 茎 鏃)	ス ク レ イ パ ー ・ 刃 器	打 製 石 斧	文 献
内田町 (瀬戸市)	n=170 下呂石:10、サヌカイト18、黒曜石:3、 チャート:135、	n=10 サヌカイト1、チャート10、水晶1	n=135 粘板岩:112、硬質砂岩:1、 安山岩:3(石材名は報告書による)	岡本編 2002
八王子 (西尾市)	n=27 下呂石:10、サヌカイト2、黒曜石:5、 チャート:10、	n=1 ホルンフェルス:1	n=2 設楽安山岩(只持):1、 ホルンフェルス1、	松井編 2003
三斗目 (豊田市)	n=87 下呂石:49、黒曜石:1、設楽安山岩:19、 安山岩:8、チャート:2、流紋岩:2、 流紋岩質凝灰岩:1、石英1、	n=25 下呂石:7、設楽安山岩:14、 安山岩:1、砂岩:1、	n=8 設楽安山岩(只持含む):6、 泥質接触変成岩:1、細粒花こう岩:1、	余合編 1993
今朝平 (旧足助)	n=216 下呂石:165、サヌカイト:26、チャート:9、 黒曜石:5、安山岩:2、設楽安山岩:9、	n=11 下呂石:3、根羽石:6、 設楽安山岩:1、ホルンフェルス:1、	n=20 根羽石:17、ホルンフェルス:1、 砂岩:2、	川合ほか 2013
馬ノ平 (旧稲武)	n=41 下呂石:15、黒曜石:13、設楽安山岩:3、 熔結凝灰岩:3、石英:1、チャート:6、	n=7 設楽安山岩:1、熔結凝灰岩:3、 凝灰岩:1、根羽石:1、チャート:1、	n=12 設楽安山岩:1、根羽石:2、 凝灰岩:4、緑色片岩:5、	川合ほか 2013
石岸 (新城市)	n=1 設楽安山岩(只持):1	n=25 下呂石1、設楽安山岩(只持):23、 熔結凝灰岩:1	n=67 設楽安山岩(只持):35、結晶片岩:10、 緑色片岩:15、玄武岩:2、塩基性岩:1、 凝灰岩:1、片麻岩:1ホルンフェルス:2、	樋上編 1993
川地 (田原市)	n=43 下呂石:7、サヌカイト:12、黒曜石:2、 凝灰岩:3、泥岩:11、設楽安山岩:1、 チャート:7、	n=12 サヌカイト:1、黒曜石:1、 凝灰岩:1、泥岩:2、チャート:7、	粗製剥片石器 凝灰岩:1、砂岩229、 n=231 ホルンフェルス:1	原田編 1993

うな著しい人為的痕跡が認められる。但し、5～8のような中期後半で確認された剥離というよりは、敲打により打ち割られた様相を呈するものである。

設楽安山岩(只持安山岩)については、近年、平井義敏らによってこの石材流通の詳細な動向が解明されつつある(平井・藤根・竹原2013)。平井らによると、もともと存在する豊川流域から越えて、この石材の流通および石材から作られた製品の移動(搬入を含めて)が顕在化するの縄文時代後期以降という。石岸遺跡の石器群は、この設楽安山岩を考える上での好資料となっている。以下、概要を紹介する。

新城市石岸遺跡では、後期中葉の八王子式期を主体する濃厚な遺物包含層が見つかった。出土遺物は、土器のほか、分銅形土偶・有溝石錘などがあるが、注目すべきは只持安山岩の集中出土で、剥片石核類の746点(合計4884.1g)は、黒曜石8点・熔結凝灰岩2点・下呂石1点・チャート1点・泥岩1点を遙かに凌駕する。対応する製品としては、打製石斧・刃器・その他大型剥片石器・部分磨製石鏃があったが、前三者が主体である。この石岸遺跡の位置は、小島が報告している原産地から直線距離で南に8.3km、豊川脇の国道などを辿ると14.8kmを測り、転石の利用を想定した場合、現豊川までは直線で2.6kmを測る。

剥片の法量は5cm前後に集中が認められるが、ここでは剥片石核の中でも最も大きな部類のものを示しておく。25は6.6×11.6×3.9cm

を測る石核で、打面転移を行いながら剥片作出が行われている。図面裏面では、5.4×9.9cmの横長剥片が作出された。26は法量15.8×13.0×2.1cmを測る大型の剥片である。

今朝平遺跡では、この設楽安山岩(只持安山岩)が大型剥片の状態で搬入されている(20)。法量8.8×11.2×2.6cmを測り、法量では石岸遺跡など、只持安山岩原産地付近で認められる大型剥片の法量と遜色がない。今朝平遺跡では、この設楽安山岩(只持石)製のものとして、石鏃9点、石錐2点のほか、石鏃などに対応する二次加工のある剥片が見つまっている。石鏃は全て凹基無茎であるが、このうちの4点は部分磨製石鏃である。また、三斗目遺跡でも、径8cmを越える設楽安山岩(只持安山岩)の大型剥片の出土が確認されている(余合編1993)。三斗目遺跡では、上記器種の他に、この石材による刃器・打製石斧も認められる(平井・藤根・竹原:734頁)。

この只持安山岩は、黄白色や灰白色の色調を呈するもので、鋭くかつ薄く剥離する性質を有する。対応する石器器種としては石鏃などの小型剥片石器から打製石斧・刃器などの大型剥片石器まで認められるが、その中でも特徴的なあり方を示すものに、打製石斧と石鏃がある。石鏃の中でも、部分磨製石鏃の存在も大きな特徴であろう。

以上、縄文時代後期中葉頃の様相では、設楽安山岩(只持安山岩)のやや広域流通とともに、今朝平遺跡では黒曜石の石塊とともに設楽安山

岩の大型剥片の搬入があった。この剥片石器石材の大型塊としての搬入現象は、サヌカイトの板状の素材礫の搬入として三斗目遺跡、石核としての天子神社貝塚でも確認される。このような大型の素材礫の出土は、近畿地域において、北白川上層式期以降に顕在化するという（田部 2007）。さらに、内田町遺跡の下呂石角礫の接合資料も同様の現象の可能性が高い。この内田町遺跡での石鏃の主要石材はチャートであり、下呂石は極めて少数であることは、単純に石器石材としての搬入を意味している訳ではないようである（表 1）。上述したような縄文時代中期後半の黒曜石の大型石塊の搬入と同一現象かは今後検証が必要とも思われるが、後期中葉頃の現象では、主として石鏃使用石材において認められる現象として指摘しておきたい。

d. 縄文時代後期後葉以降

ここでは、後期後葉以降晩期末までの様相を概観する。

下呂石 図 5 には、下呂石の特徴的な剥片石核類を掲載した。27～30 は馬見塚遺跡旧ハッカ地点出土資料で、この地点の出土土器は縄文時代後期後葉を主体し、同時に採集された石器群もこの時期のものと考えられる。当地は犬山扇状地末端に位置する遺跡で、当時は放射状に広がる木曽川由来の河道の筋がより遺跡に近い位置まで存在していた可能性がある。より身近に下呂石円礫を採集できる位置にあったといえる。馬見塚遺跡では、円礫礫面を残す剥片石核類が多数出土している。その中でも最大の法量を示す 27 と最小の法量を示す 28 を図示した。27 は $7.8 \times 5.9 \times 3.2\text{cm}$ を計り、作出された剥片の最大法量は $4.9 \times 3.5\text{cm}$ である。一方 28 は、 $3.2 \times 2.8 \times 2.2\text{cm}$ を測り、最大 $2.2 \times 2.0\text{cm}$ の剥片が作出された。30 は横長の剥片で、 $2.4 \times 6.2 \times 1.1\text{cm}$ の法量を測る。

31～33 は名古屋市守山区牛牧遺跡出土資料で、31・32 は円礫で上下両極に作出された剥片・石核類である。31 は $5.0 \times 3.0 \times 1.4\text{cm}$ 、32 は $5.1 \times 2.6 \times 1.3\text{cm}$ の法量を呈する。一方、33 は下呂石角礫の二次加工のある剥片である。 $2.8 \times 2.4 \times 1.2\text{cm}$ の法量を呈する。

34 は半田市宮西貝塚出土資料で、円礫である。 $6.4 \times 3.8 \times 1.5\text{cm}$ の法量を測り、法量の大きい剥

片である。もとの原石の法量は、図 5 の 27 程度はあったかもしれない。

35・36 は碧南市正林寺貝塚出土資料で、晩期前半に属するものと考えられる。35・36 とともに円礫で、35 は上下両側から打撃が加えられており、 $2.8 \times 2.6 \times 1.2\text{cm}$ の法量を有する。36 は打面転移を行いつつ作出された剥片で、 $2.2 \times 3.4 \times 1.2\text{cm}$ の法量がある。

37 は西尾市枯木宮貝塚出土資料で、円礫である。 $4.2 \times 4.0 \times 1.1\text{cm}$ の法量を測る逆三角形を呈する剥片である。

38 は瀬戸市大坪西遺跡 05 区出土資料で、晩期前葉に属するもので、 $5.4 \times 3.2 \times 1.0\text{cm}$ を測る剥片である。礫面および礫の粒形を見た場合、38 は馬見塚遺跡・牛牧遺跡の資料により類似するものの、後期中葉頃でみた、同遺跡 01A 区から出土した 12・13 は爪状の痕跡が残存するなど、摩滅度がより低いものであった。両者の礫面風化度の差については、齊藤などの成果を援用すると、12・13 は木曽川・飛騨川の合流地点付近など、より上流域で採取された転石であったと考えられるか（齊藤 1993）。

39・40 は設楽町神谷沢遺跡出土資料で、円礫剥片である。39 は 90 度打点を転移させ作出された剥片で、 $5.8 \times 4.0 \times 1.4\text{cm}$ を測る。40 は両極から打撃が加えられているもので、 $3.0 \times 2.6 \times 0.8\text{cm}$ の法量を測る。

41 は豊川市麻生田大橋遺跡出土資料で円礫である。いわゆる楔形石器であるが、両極から剥片が作出された石核の可能性もある。 $4.2 \times 3.1 \times 1.2\text{cm}$ の法量を測るもので、最大 $2.9 \times 2.9\text{cm}$ の剥片が作出された。45 は田原市保美貝塚出土資料で、円礫である。礫外面側から上下両側から剥離調整が行われたものを 90 度打面を変えて作出された横長の剥片で、 $2.2 \times 2.0 \times 1.4\text{cm}$ の法量を測る。

42～44 は額田町東光寺遺跡出土資料である。42・43 は円礫由来で、42 は法量 $4.4 \times 4.2 \times 1.2\text{cm}$ を測る。連続した同一方向から作出された剥片である。43 は 90 度の打面転移を行い、礫全体に渡る剥片作出がなされた石核で、 $5.4 \times 3.4 \times 3.4\text{cm}$ の法量を測る。なお、44 は礫面が認められないものであるが、主に同一方向から作出された断面形状台形を呈するもので、法量

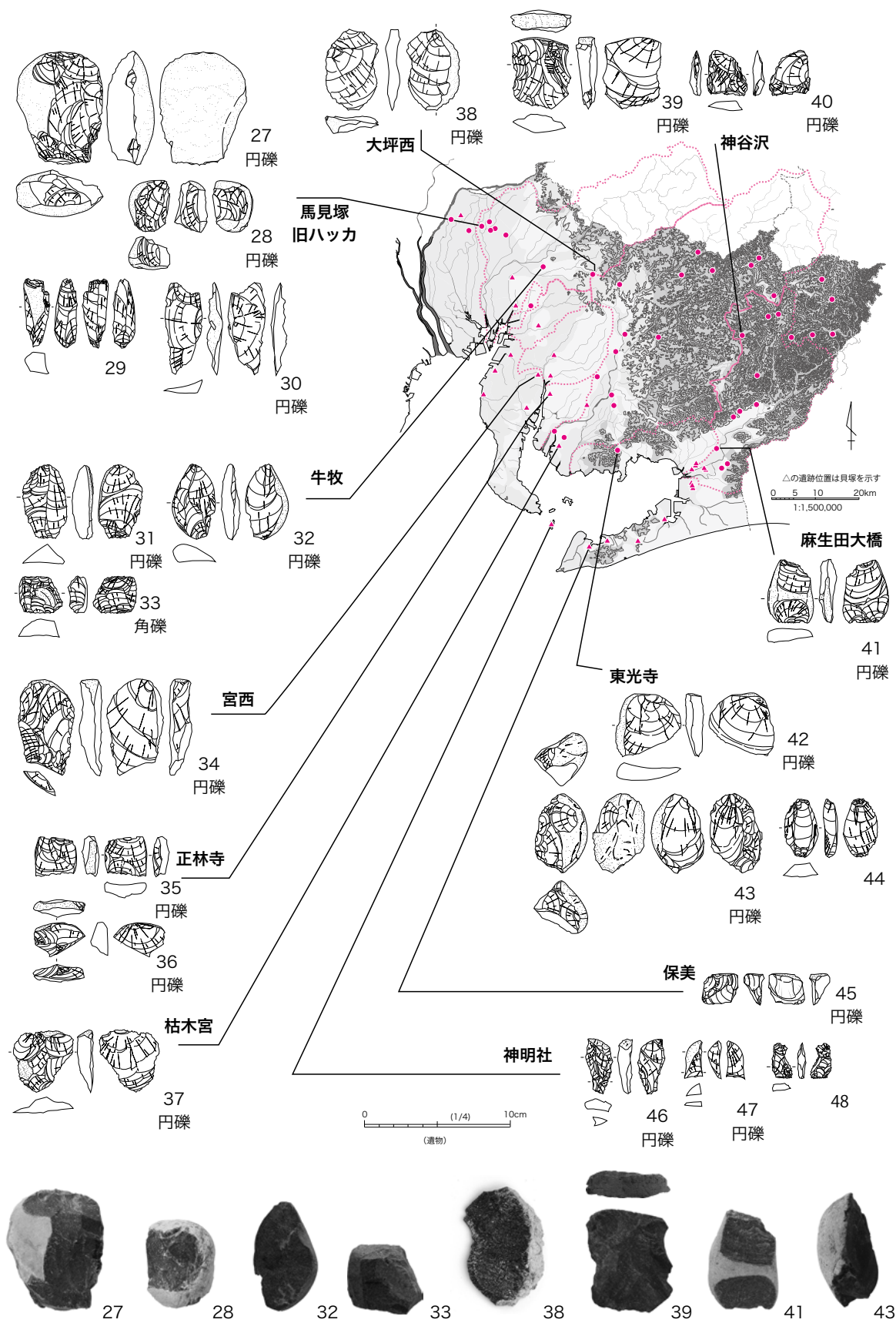


図5 縄文時代後期後葉～晩期の主要な剥片石核類（下呂石）【写真は縮尺不同】

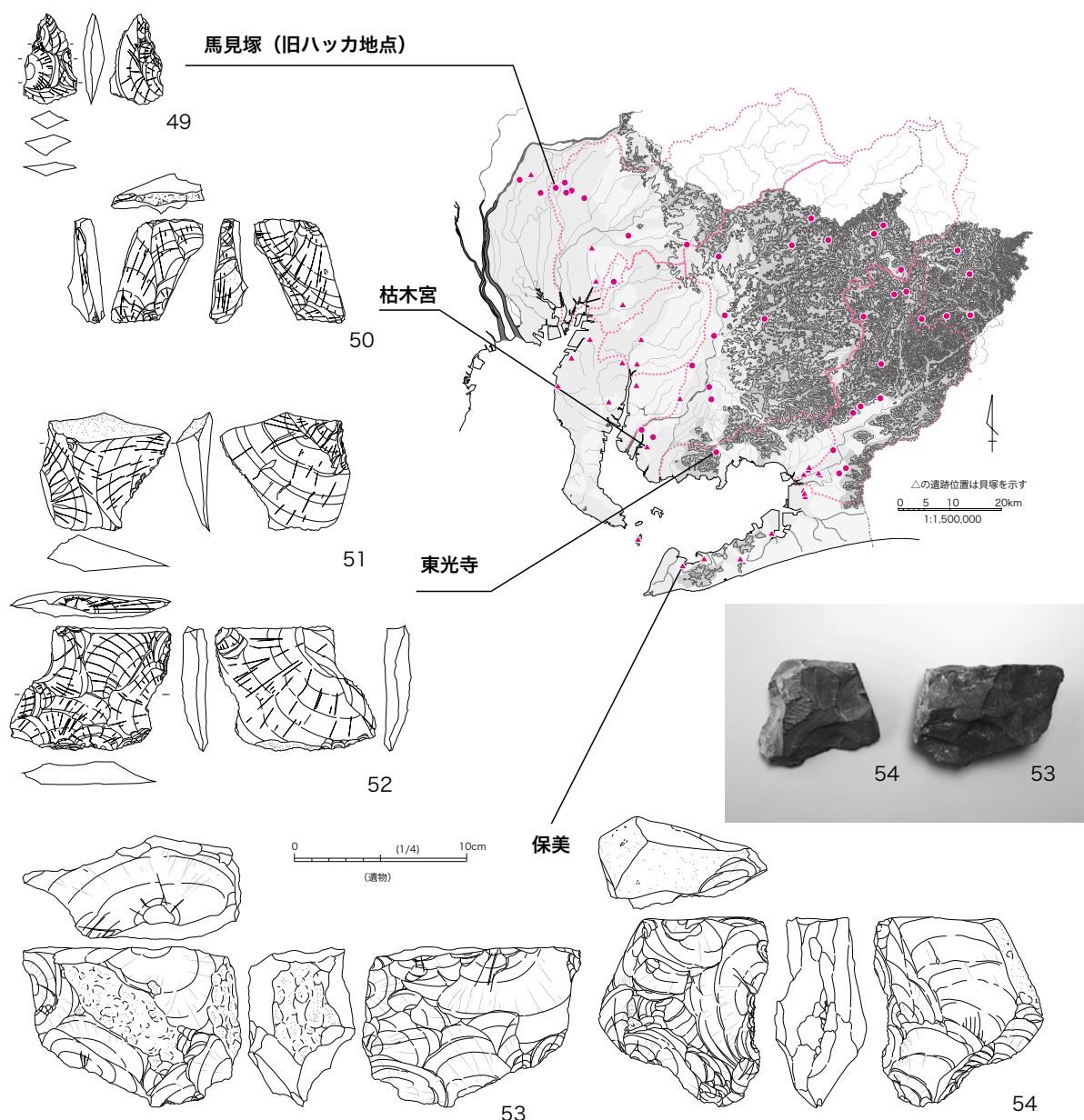


図6 縄文時代後期後葉～晩期の主要な剥片石核類（サヌカイト）

4.0×2.3×1.0cm を測る。

46～48 は南知多町篠島の神明社貝塚出土資料である。後期後葉から晩期末に向けて継続して形成された遺跡で、この資料の時期も後期後葉から晩期末に属するものである。46・47 は円礫剥片で、法量の大きい46で、3.7×1.8×1.0cm を測る。

サヌカイト 主な大型剥片石核類を図6に示した。

49 は馬見塚遺跡旧ハッカ地点の資料である。下呂石採集地に近く、下呂石円礫が圧倒的多数

の地点であるものの、サヌカイトの剥片も出土する。3.0×4.8×1.2cm の法量を測るものである。

50 は枯木宮貝塚出土資料である。図面の上下から剥片作出が行われていたと考えられ、現況で6.0×4.8×2.2cm の法量を有する剥片、あるいは残核である。

51・52 は東光寺遺跡出土資料である。上述した42～44と同様に、晩期中葉の稲荷山式を中心とする遺物群とともに凹地内から出土したものである。この凹地内からは、比率は示し得ないものの、サヌカイト製の剥片石核類が多

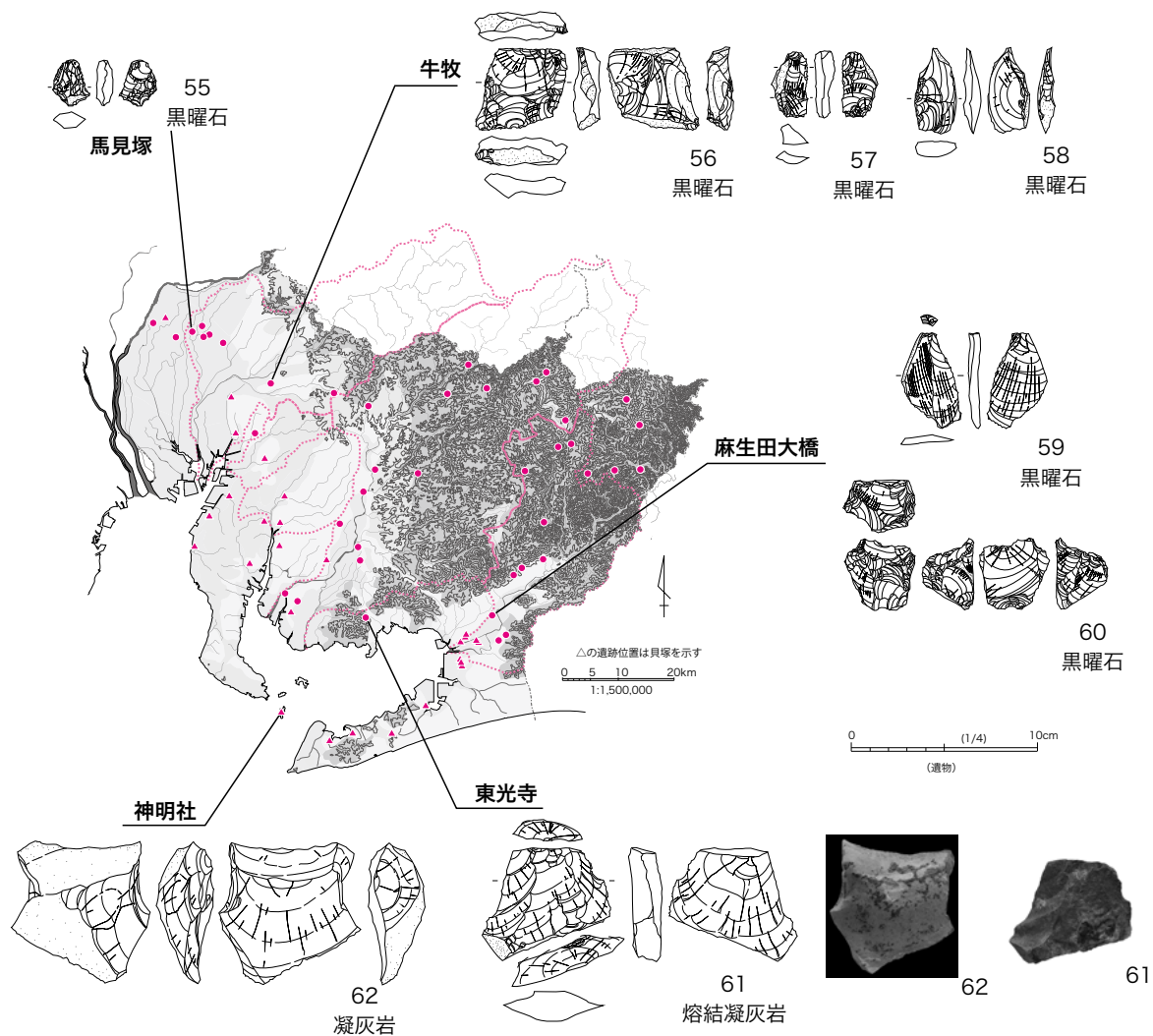


図7 縄文時代後期後葉～晩期の主要な剥片石核類（黒曜石・凝灰岩）【写真は縮尺不同】

数出土している。51は $7.2 \times 9.2 \times 1.5\text{cm}$ 、52は $6.8 \times 7.4 \times 2.1\text{cm}$ の法量を呈するものである。これらを石核とした場合、51で $3.1 \times 5.1\text{cm}$ 、52で $5.3 \times 5.2\text{cm}$ を最大とする剥片が作出されたものと考えられるか。

53・54は保美貝塚出土資料である。53は $9.2 \times 12.6 \times 6.2\text{cm}$ を測るもので、図面上端は打面の調整を図りつつ、 $5.8 \times 12.4\text{cm}$ ほどの剥片作出が行われたか。図面の裏面では、最大 $5.8 \times 8.0\text{cm}$ の剥片が作出されたようである。54は $11.0 \times 9.8 \times 5.2\text{cm}$ の法量を測るもので、図面裏面では、最大 $7.3 \times 10.9\text{cm}$ の剥片が作出されている。サヌカイトの多くは二上山産と思われるが、53は金

* 田部 剛士氏のご教示による。なお、小島 隆が行った保美貝塚出土資料の分析でも金山産とされたサヌカイトの存在が報告されている（小島 1993：102頁）。

山産の可能性もある*。

サヌカイトに関しては、東光寺遺跡・保美貝塚と東三河沿岸部に濃密に分布しており、平井稲荷山貝塚でも石鏃の主要石材がサヌカイトとなっている（小島 1993）。

黒曜石 56～58は牛牧遺跡出土資料である。56は法量 $4.8 \times 4.4 \times 1.4\text{cm}$ である。表裏で90度方向を変えて両端から、最大 $3.5 \times 3.2\text{cm}$ の剥片が作出されている。

59・60は麻生田大橋遺跡出土資料で、当遺跡では数値には示し得ないものの、黒曜石剥片石核類が多量に出土している。60はブロック状を呈する石核で、打面を変えながら最大 $3.3 \times 3.1\text{cm}$ の剥片が作出されている。

縄文晩期では遺跡出土の石核（残核）は径5cm程度を最大とする。牛牧遺跡の56や麻生

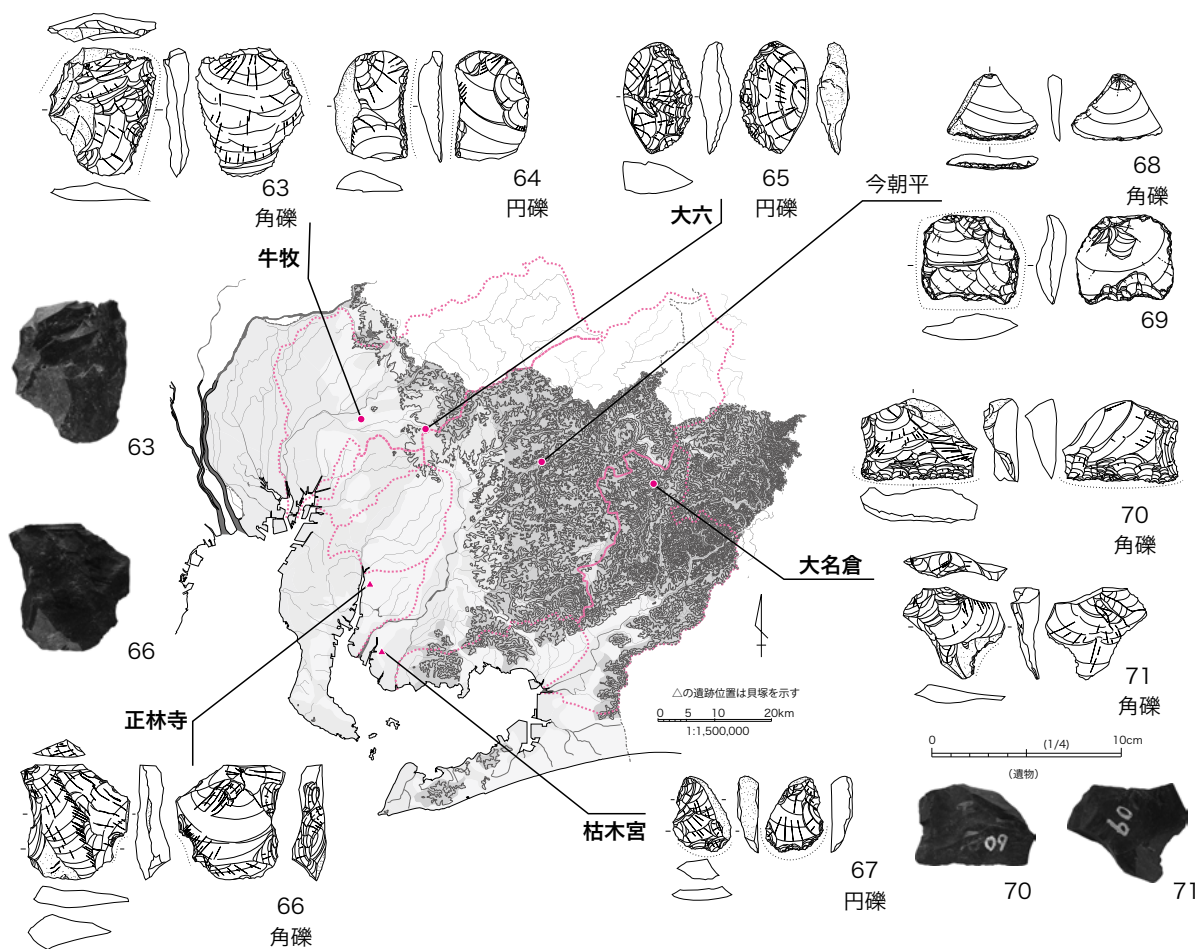


図8 縄文時代後晩期の下呂石製スクレイパー・使用痕剥片【写真は縮尺不同】

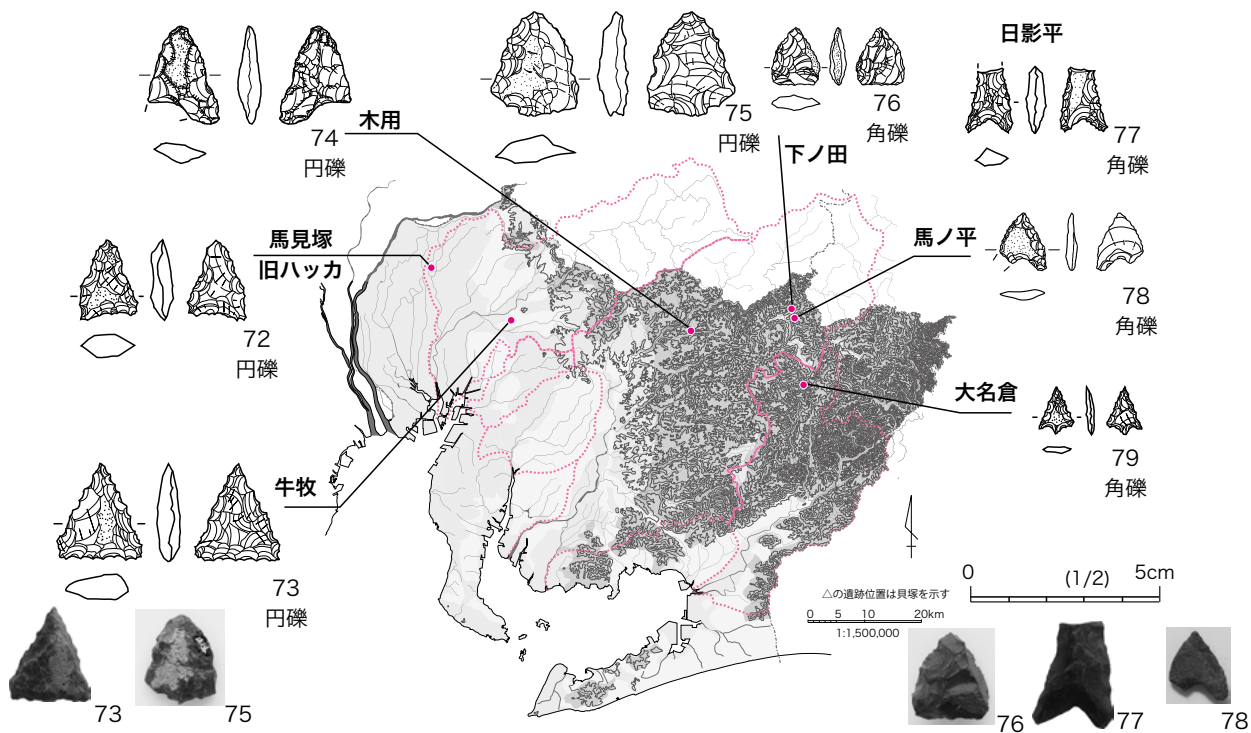


図9 縄文時代後晩期の石材礫面を残す下呂石製石鏃【写真は縮尺不同】

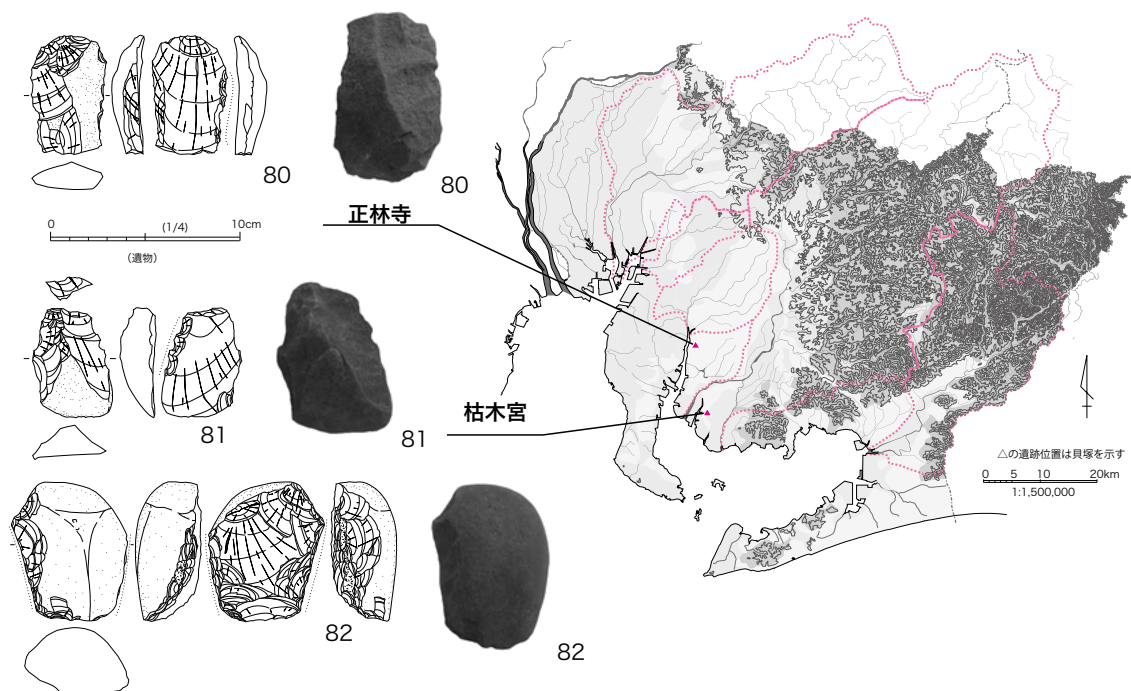


図 10 縄文時代後晩期海岸部における根羽石製石器出土状況【写真は縮尺不同】

田大橋遺跡の 60 などが法量の大きい事例と思われる。正確な法量は確認していないものの、麻生田大橋遺跡では、他にレモン大の黒曜石塊が 2 点出土しているという（小島 1993：100 頁）。周囲に礫面が確認されるため、搬入された黒曜石自体も法量としては大きいものとは決していえないかもしれないが、麻生田大橋遺跡では、多数の黒曜石剥片石核類を確認することができる。黒曜石は一宮市馬見塚遺跡でも極めて少ないものの、石鏃素材として製作・使用されている（55）。また図示などはしていないものの、田原市保美貝塚でも、黒曜石製の石鏃やそれに対応する二次加工のある剥片などが出土している（川添 2011a）。

凝灰岩あるいは熔結凝灰岩 61 は東光寺遺跡出土資料で、 $6.0 \times 6.8 \times 1.8\text{cm}$ の法量を呈する剥片である。62 は神明社貝塚から出土した剥片で、 $5.6 \times 5.4 \times 3.0$ の法量を有する。凝灰岩と考えられるが熔結凝灰岩に類似する部類のものと考えられるか。

熔結凝灰岩に関しては、縄文時代後晩期になると、尾張部、特に東部丘陵部などでの石材使用が低調になる。馬ノ平遺跡では、熔結凝灰岩製の石鏃・スクレイパーのみならず剥片の出土も確認されていることから、稲武地域を含めた

東三河山間部地域から海岸部を中心に剥片からの製作・使用がなされていたと考えられる。

以上から、後期後葉から晩期の状況についてまとめてみる。

後期後葉以降、下呂石の出土が顕在化するものの、三河北東山間部を除き、尾張・三河地域の海岸部および低地部においては円礫の出土が顕在化することが確認できる。そのことは東光寺遺跡・麻生田大橋遺跡で確認される下呂石が円礫であることに示され、この傾向は今回図示はしないものの、新城市観音前遺跡でも同様の傾向であることを確認している。礫の粒径としては、3cm 以上 6cm 程度のものが多く認められるようで、3cm 以上の剥片が得られれば石鏃に十分対応する。この下呂石円礫の大量流通は、主に石鏃に対応した現象と考えることができよう。上述した黒曜石に関しても、同様により小型の法量を呈する剥片が作出されており、主体として石鏃などに対応していることは、剥片および製品の法量からも矛盾はない。

一方、尾張東部丘陵部から三河山間部の様相は複雑である。下呂石円礫でも粒径の大きくかつ礫面風化度が低いものが大坪西遺跡で確認されている。この傾向は、時期が異なるものの縄

文時代早期後半を主体とする瀬戸市八王子遺跡でも見つかっており (1)、この下呂石の流通は、以前から継続してあったと考えられる。一方、名古屋市牛牧遺跡、豊田市足助地区今朝平遺跡、同市稲武地区下ノ田遺跡、同馬ノ平遺跡では、下呂石角礫も一定量が確認される*。

現設楽町と東栄町域の下呂石剥片石核類は、細片化されているものが圧倒的多数を占め、後述するように径5cmを越える剥片は、スクレイパーや使用痕のある剥片以外としては39以外、極めて稀少である。

この現象においては、当地は石鏃などにおいて下呂石製石器の使用が低調であったとも捉えられるかもしれない。しかし笹平遺跡から採集された石鏃305点のうち152点と約6割が下呂石製であることからみると (小島1993:110頁)、設楽地域においても後晩期の下呂石の高い利用状況は、他の尾張・三河地域と変わらない。今後の設楽町内の調査で良好な資料が出土する可能性もあるが、現状の資料から推察すると、持ち込まれた原石を細片化するまで、剥片作出が行われた可能性が考えられる。この点、大きな状態で廃棄される海岸低地部での剥片の作出様相と異なるかもしれない。このことは、下呂石製石鏃で、角礫の礫面を有する資料が、三河北東山間部のみに偏っている状況と合わせて考えられよう (図9)。

スクレイパーや刃器・使用痕のある剥片は石鏃と同程度の法量のものもあるものの、長径5cm以上を呈するものまで認められる (図1)。下呂石に関して言えば、円礫素材のもので、この傾向を指摘できるものもあるものの (64・65・67・124)、角礫で法量が大きい状態で確認される剥片の大多数が、使用痕のある剥片やスクレイパーであったりする (63・66・68・70・71)。この傾向は、大名倉遺跡・今朝平遺跡などの三河山間部のみならず、牛牧遺跡・正林寺貝塚など、低地や海岸部でも同様の傾向が認められるのである。このことから、下呂石角礫の一部に関しては、法量の大きな剥片に関し

* 下呂石円礫と角礫の識別は素材礫風化面が残存していなければ確定できない。円礫の方が粒径のより小さいものが多いと仮定すると、円礫と同定できる比率が角礫に対して多くなる可能性は考慮する必要がある。

ては、石鏃の素材剥片ではなく、いわば製品として搬入されてきたもののだといえる。

なお、正林寺貝塚からは矢作川流域の遺跡で打製石斧や刃器などの石材となる根羽石製の使用痕のある剥片も出土している (80)。根羽石自体は、矢作川の上流域から中流域およびその位置に相当する支流域の各遺跡で、打製石斧・刃器・礫器などの大型の打製石器に対応する石器石材として使用されているものである。現下流域でも散発的に出土するようであり、今回、枯木宮貝塚でも、使用痕のある剥片 (81) と礫器 (82) を確認した。ところが、枯木宮貝塚では出土した打製石斧2点はいずれも緑色片岩であり (松井編2007)、沿岸部においては河川流域との石材動向とは様相が異なり、注目できよう。これらは、いずれも縄文時代晩期前葉～中葉にかけての事例である。

4. 剥片石核類から見た様相の変遷

以上、石鏃およびスクレイパーに対応する剥片石核類について、時期別に様相の変化を述べた。かつて、関西・東海地域の石匙・スクレイパーを集成して論じた際、サヌカイトの産地に近い関西地域と、そこから相対的に距離が離れている東海地域では、前者の方の法量が大きく、原産地からの距離が遠いほど法量が小さくなることを述べた (川添2004)。今回取り上げた石材は、いずれも原産地と流通ルートなどの研究が解明あるいは解明されつつあるものである。それで見てみると、図5・図6は、その関係を図上でも確認することができる。図5は下呂石円礫が多く掲載されているが、神明社貝塚や保美貝塚では確かに法量が小さくなるようである。しかし、宮西貝塚 (34)・枯木宮貝塚 (37)・東光寺遺跡 (42～44)・麻生田大橋遺跡 (41) では、剥片石核類の長径が5cm内外と、残存の良好なものに関しては、法量には大きな差がないことも指摘できる。流通した下呂石円礫の礫径としては、馬見塚遺跡旧ハッカ地点で見た28を最小として、径5cm内外のものが多く流通していたものと考えられる。小型剥片石器の中でも石鏃を製作目的器種とした場合、素材剥片の法量は長径3cm程度あれば十分である (図

1) ことから、これらの下呂石円礫が多く流通した要因としては、石鏃の多量化現象との関連性が考えられよう。

縄文時代晩期についても、保美貝塚で出土しているサヌカイト石核は、渥美半島を挟んで伊勢志摩方面から持ち込まれた場合、この傾向を窺うことができるのである。一方、黒曜石は麻生田大橋遺跡でも多量に見つかっている。以上のことは、かつて石材別に出土量を等高線で示した、小島の成果を確認するものである*（小島 1993）。

ところが、この傾向とは異なる様相を呈するものとして、次の2点を挙げておきたい。一点目は縄文時代後期中葉頃の大型石塊で、二点目は下呂石角礫の大型剥片の一部である。前者に関しては、縄文時代中期後半の黒曜石を主体とした大型の石塊から、後期中葉では、黒曜石を含めてサヌカイト・設楽安山岩（只持安山岩）と、石材の種類が増える。中期後半の事例は、竪穴建物や掘立柱建物の廃棄（終了）に関する行為によるもので、後期中葉の事例は、配石遺構形成など、より広範囲の包含層形成に関する行為に伴うもので、質的な違いが示唆される。

一方、後者に関しては、下呂石角礫による使用痕剥片の様相が、山間部から低地部さらには海岸部にかけて、類似していることは興味深い。図8に掲載した資料は、今朝平遺跡の資料を除いて、縄文時代後期後葉から晩期のみを主体とする資料である。図10の根羽石製製品の移動を含めて、例えば衣浦湾岸や海岸部と矢作川中流域との日常的な人的な関係および季節的なものも含めての集団移動などを想定することもできるかもしれない。

5. 今後の課題

剥片石核類は、報告書整理作業方針および報告書紙面の都合などにより、報告掲載の程度が著しく左右される器種といえる。そもそも製品の報告が優先されるのは当然である。しかし、今回見たように、製品とその製作に関わると考えられる剥片石核類とが不整合な場合は実際には多く、最もよく言われる話題としては、当地で製作されているか、あるいは製品が持ち込ま

れているのかの議論では、欠かせない情報となる。剥片石核類に関わらず、考古資料は、当時の生活痕跡のごく一部しか保存されていないのである。いろいろ事情はあるものの、すべての出土遺物に対して、まずは分析対象とする努力は常にすべきであろう。発掘調査などでもさまざまな方法があろうが、分別のある振りを装い簡単に片付けて、結果として有意な情報を削ぐことになってしまわないか、自戒の念も込めて常に気をつけたいところである。

剥片石核類に戻すと、今回チャート石材についてはほとんど触れなかった。稿を改めて論ずる予定である。

附・石岸遺跡の部分磨製石鏃について

最後に、石岸遺跡から出土した部分磨製石鏃について、若干言及をしておく。

筆者は、石岸遺跡発掘調査報告書で、部分磨製石鏃として、図11の2点を提示した。いずれも設楽安山岩（只持安山岩）製で、八王子式を中心とする後期中葉に属するものである。

83は、これまで機会あるごとに述べているように、部分磨製石鏃の類型Vである（川添 2011b）。近年、豊田市域の資料を集成する機会があり、大工原 豊との議論の経緯についても触れておいた（川添 2013a）。この鏃身部全体が薄く扁平に作られる類型Vは、その様相が特異であり、縄文時代早期のものと思われるかもしれない。しかし、東海地域において、発掘調査から得られる件資料を含む石器群の主体時期と、この類型で多く使用される只持安山岩という使用石材の時期的特徴とを勘案すると、八王子式期以降の縄文時代後期中葉以降と考えざるを得ないのである。

* このことに関連して、下呂石円礫の流通で、知多半島から渥美半島を経由して、三河湾奥部へ行くルートを選定したことがある。これは、条痕文系壺内から下呂石原石が20点以上出土した東海市烏帽子遺跡の事例（石黒編 2003）や、条痕文系壺内から接合資料を含むサヌカイト剥片が出土した美浜町下高田遺跡の事例（澄田 1967）など、弥生時代の事例を援用したものであった。今回、縄文時代の事例のみを集成して検討した結果、渥美半島先端から三河湾奥部への強いルートを確認することができない結果となった。このことから、この案は一旦保留したい。なお、この件については、私に対しての田部剛士・齊藤基生各氏からご指摘があったことを記しておく。

問題は、この特異な類型が出現した背景についてである。筆者は、残念ながらまだ明確な説明を持ち合わせていないが、同時期に関東沿岸部などで広く分布するイノシシ雄牙製鏃の存在が糸口になるのではと考えている(図14)。イノシシ雄牙製鏃は、鏃身全体が扁平である上

に、両辺には細かい刻みが施されているものが多い。著しい鋸歯縁を呈するものが多くなる当該時期の石鏃の特徴が反映されているのかもしれない。只持安山岩が、白色気味の色調を呈しているのも、類似の視覚的効果を出しているかもしれない。もちろん、イノシシ雄牙製鏃では、鏃身に小穿孔が施されていることと、凹基無茎鏃もあるものの平基無茎鏃が多いなど、独自の特徴も認められる。いずれにしても、骨角製鏃では製作工程上研磨が施されている場合が多いことも注目されよう。

一方、84はそもそも部分磨製石鏃としても特異であることは報告でも記しておいた。最大の理由は二点あり、研磨が施されていないながら断面形状が不均一である点と、さらには両側辺を

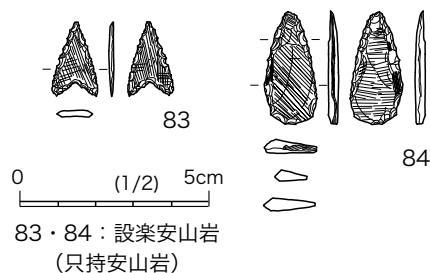


図11 石岸遺跡部分磨製石鏃など
(樋上編 2015 より改変)

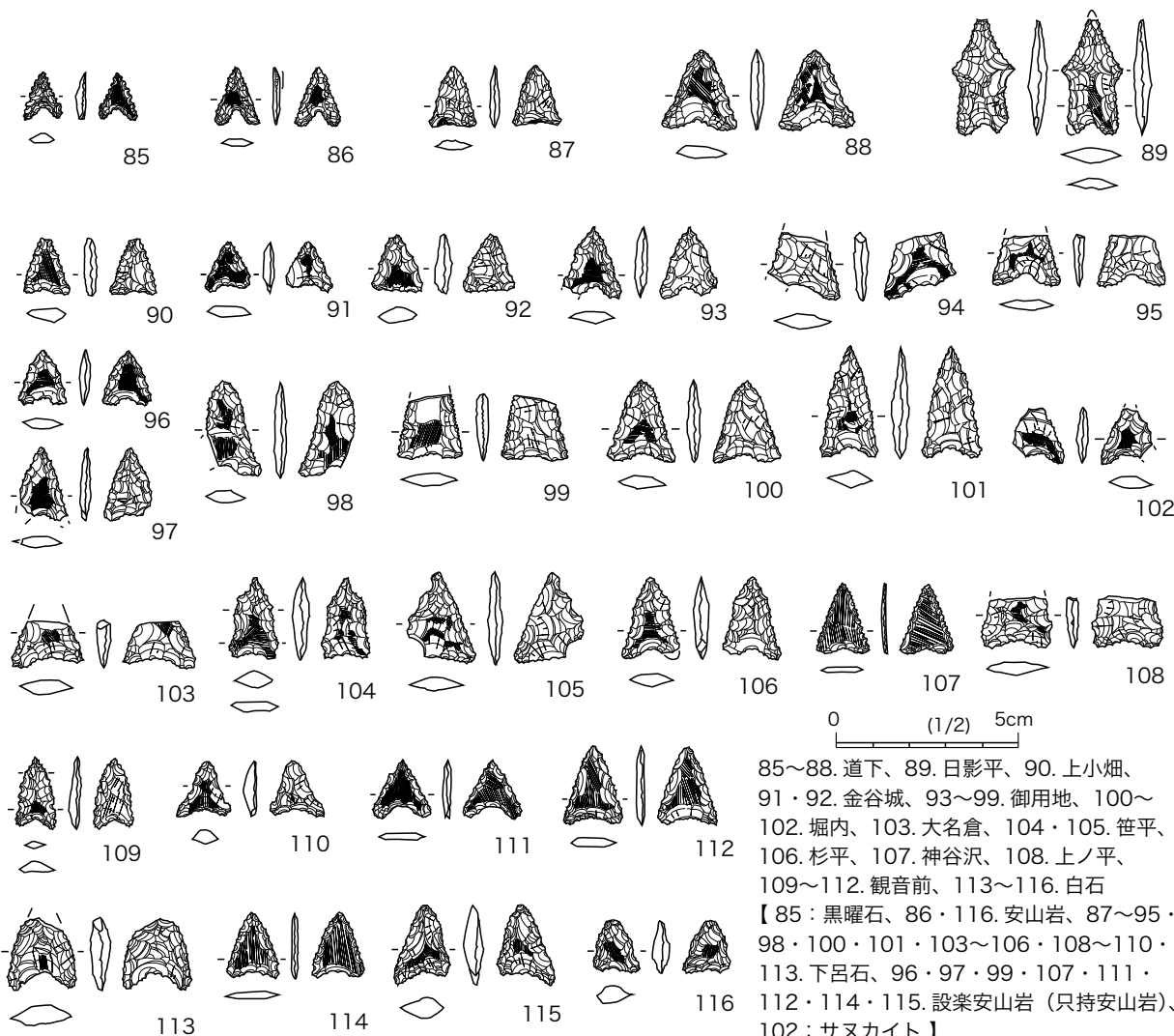


図12 三河地域などの部分磨製石鏃

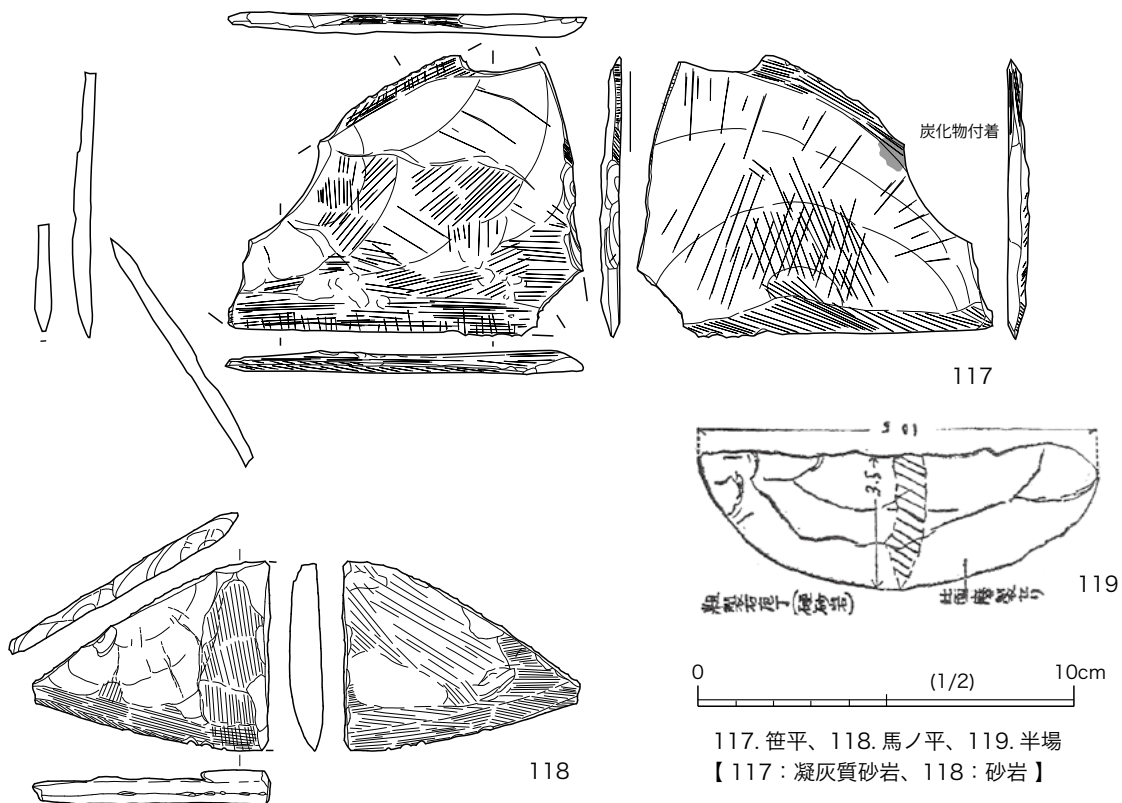


図 13 三河地域における石鋸（擦切具）（川添 2016 より）

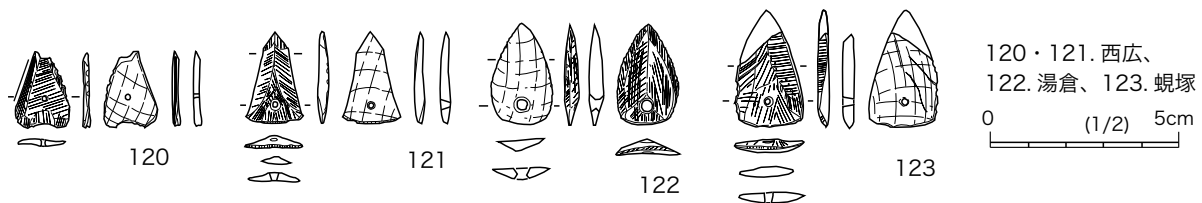


図 14 イノシシ雄犬歯製鋸

中心に、幅 1mm 弱ではあるものの平坦面が形成されている点である。この平坦面を精査すると、長軸方向への線状痕が認められる。

近年、縁辺部の形状で類似のものが見つかった。設楽町笹平遺跡で出土した、石鋸（擦切具）である（117）。これは凝灰質砂岩製で、剝離の後全面研磨が施されたもので、両側辺に幅 1.5mm 弱の幅を有する平坦面の形成が認められる。これも平坦面を観察すると、長軸方向に線状痕が認められる。84・117 とともに側辺あるいは縁辺に対象物を当て、長軸方向に施溝動作が行われたことが推測されるのである。従って、84 は部分磨製石鋸ではなく、擦切具の可能性が高いことを指摘しておく。擦切具とした場合、対象となる石材は同等以下の硬度のものが該当

するのであろうか。84 は、117 に対して、より硬質でより細い擦り切り行為を行うことに適していた可能性があるだろう。

本稿は、平成 27 年 11 月 29 日に名古屋市博物館で開催された、「あいちの考古学 2015」セッション 2「あいちの石器時代—遺跡・石器・石材」での基調報告を基にしている。この企画をして頂いた、川合 剛氏には平素よりさまざまな形でご教示を頂いている。本稿使用の愛知県地図も川合氏作成のものをご好意で使用させて頂いた。筆者の得意ではない石材については、堀木真美子・平井義敏の両氏に、普段からから多くのご教示を頂いている。また、セッション当日は、白石浩之先生および齊藤基生氏には多大なるご教示を賜った。岩野見司先生には馬見

塚遺跡出土資料の調査などで、ご配慮を頂いた。

また、何よりも、石器研究に全く無縁であった筆者が、現在継続して縄文時代・弥生時代の石器研究を行うことができているのは、その機会を与えて頂いた、加藤安信・都築暢也・小澤一弘・石黒立人などの先達諸氏のお陰である。また、平素より研究の可能性を広げて頂いた、大塚達朗先生にも感謝申し上げる次第である。

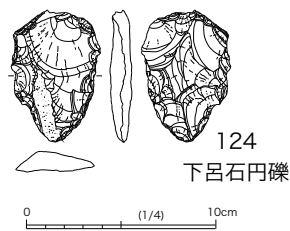


図 15 豊田市（旧足助町）吉田遺跡出土スクレイパー

資料の所在

1～4・8～10・12・13・16・21～26・31～33・38・41～44・51・52・56～61・63・64・73・83・84・117：愛知県埋蔵文化財調査センター、5～7・14・18～20・68・69・74～76・90～92・124：豊田市教育委員会、11：岡本編 2002 より、17：井関・大参ほか 1989 より、27～30・49・55・72：一宮市教育委員会、34：東浦町教育委員会、35・36・66・80：高浜市教育委員会、37・50・67・81・82：西尾市立寺津中学校、15・39・40・70・71・78・79・103～107・118：設楽町立奥三河郷土館、45・53・54：南山大学人類学博物館、46～48・62：南知多町教育委員会、65：瀬戸市教育委員会、77・89：根羽村教育委員会、85～88：恵那市教育委員会、93～102：安城市教育委員会、109～112：新城市教育委員会、113～116：豊橋市教育委員会、119：大場 1932 より、120・121：市原市教育委員会、122：高山村教育委員会、123：浜松市教育委員会

参考文献

- 石原哲弥 1981 「飛騨下呂石を素材とした石器の研究—益田郡下呂町湯ヶ峯産のハリ質黒雲母安山岩—」『飛騨史学』2. 26～35 頁 飛騨史学会
- 岩田 修 1995 「湯ヶ峰流紋岩と下呂石」『飛騨と考古学 飛騨考古学会 20 周年記念誌』飛騨考古学会
- 大場磐雄 1932 「新たに発見した石器時代敷石住居跡」『上代文化』10.28～41 頁 上代文化研究会
- 川添和暁 2004 「愛知県における縄文時代後期・晩期の石器について」『第 6 回関西縄文文化研究会 縄文時代の石器Ⅲ—関西の縄文後期・晩期—』689～692 頁 関西縄文文化研究会
- 川添和暁 2011a 「保美貝塚の石器・骨角器—南山大学所蔵資料とその意義」『南山大学人類学博物館 オープンリサーチセンター 2010 年度年次報告書 付編 研究会・シンポジウム資料』327～350 頁 南山大学人類学博物館
- 川添和暁 2011b 『先史社会考古学—骨角器・石器と遺跡形成からみた縄文時代晩期』東京 六一書房
- 川添和暁 2011c 「下呂石から見た東海地域石器群の様相」『第 4 回 下呂石シンポジウム 2011 資料集』51～65 頁 下呂石シンポジウム実行委員会
- 川添和暁 2013a 「縄文時代の石器群」『新修豊田市史 18 資料編 考古Ⅰ 旧石器・縄文』696～711 頁 豊田市
- 川添和暁 2013b 「奥三河地域の縄文時代後晩期の様相について—東栄町引田遺跡・本郷桜平遺跡を中心に—」『研究紀要』14. 1～10 頁 愛知県埋蔵文化財センター
- 川添和暁 2013c 「馬見塚遺跡における遺跡形成過程と出土遺物の様相」『論集 馬見塚』19～42 頁 考古学フォーラム編集部
- 川添和暁 2013d 「尾張低地帯における縄文時代遺跡の様相」『論集 馬見塚』117～134 頁 考古学フォーラム編集部
- 川添和暁 2015a 「豊田市川原遺跡出土打製石鏃について—西三河地域における弥生時代打製石鏃の様相—」『豊田市史研究』6. 165～186 頁 豊田市
- 川添和暁 2015b 「弥生時代の石器群」『新修豊田市史 19 資料編 考古Ⅱ 弥生・古墳』790～795 頁 豊田市
- 川添和暁 2015c 「縄文時代～弥生時代の遺跡・石器・石材」『平成 27 年度考古学セミナー あいちの考古学 2015』42～43 頁 愛知県埋蔵文化財センター
- 小島 隆 1993 「東三河地方を中心とした石鏃素材の分布と流れ」『麻生田大橋遺跡発掘調査報告書』99～111 頁 豊川市教育委員会
- 小島 隆 1994 「東三河地域を中心とした石鏃素材の分布（1）—遠隔地から搬入された石材—」『三河考古』7.1～19 頁 三河考古談話会
- 小島 隆 1995 「東三河地域を中心とした石鏃素材の分布（2）—地元で産出する石材—」

『三河考古』8.1～12頁 三河考古談話会

小島 隆 2001 「石鏃の製作実験とその周辺」『三河考古』14.85～101頁 三河考古談話会

小島 隆 2003 「石鏃などに使用された石材“只持安山岩”について」『三河考古』16.91～96頁 三河考古談話会

齊藤基生 1993 「下呂石—飛騨・木曽川水系における転石のあり方—」『愛知女子短期大学紀要・人文編』26. 139～157頁 愛知女子短期大学

齊藤基生 1994 「下呂石の移動」『愛知女子短期大学紀要・人文編』27. 113～130頁 愛知女子短期大学

齊藤基生 2002 「石器の石材」『愛知県史 資料編1 考古1 旧石器・縄文』722～726頁 愛知県

佐野 元 2001 「東海地方西部縄文晩期縁帯文土器様式の様相 瀬戸市大六遺跡出土晩期前葉遺物を中心として」『研究紀要』9. 1～82頁 財団法人 瀬戸市埋蔵文化財センター

澄田正一 1967 「伊勢湾沿岸に分布するサヌカイト（讃岐石）について」『末永先生古稀記念古代学論叢』419～431頁 末永先生古稀記念刊行会

建石 徹・二宮修治 2013 「豊田市内遺跡出土黒曜石資料の産地分析」『新修豊田市史 18 資料編 考古1 旧石器・縄文』737～742頁 豊田市

田部剛士 2001 「石器石材の変遷と流通—主に愛知県の下呂石を中心に—」『三河考古』14.1～31頁 三河考古談話会

田部剛士 2007 「サヌカイトの供給（二上山）」『縄文時代の考古学』6. 178～187頁 東京 同成社

中村由克・神取龍生・平井義敏・野々山禎久 2015 「設楽地域の石器石材について」

『平成27年度考古学セミナー あいちの考古学2015』54～55頁 愛知県埋蔵文化財センター

中村由克・堀木真美子・川合 剛・平井義敏 2016 「萩平遺跡の石器石材の再検討」『研究紀要』39. 33～42頁 名古屋博物館

久永春男 1972 「第八章 結語」『伊川津貝塚』159～168頁 渥美町教育委員会

平井義敏 2015 「愛知県をとりまく石材環境」『平成27年度考古学セミナー あいちの考古学2015』38～39頁 愛知県埋蔵文化財センター

平井義敏・藤根 久・竹原弘展 2013 「設楽火山岩類起源の玄武岩・安山岩製石器について —根羽石と只持安山岩—」『新修豊田市史 18 資料編 考古1 旧石器・縄文』715～736頁 豊田市

平野吾郎ほか 1968 「愛知県設楽町神谷沢遺跡の調査」『史観』77. 68～90頁 早稲田大学史学会

増子康真 1975 「縄文文化研究の現状」『東海先史文化の諸段階 本文編』名古屋

報告書など

池本正明編 2015 『車塚遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第190集

石黒立人編 2003 『烏帽子遺跡II』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第117集

井関弘太郎・大参義一ほか 1989 『刈谷市史 第五巻 資料 自然・考古』刈谷市

岡本直久編 2002 『内田町遺跡』瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告書第24集

岡安雅彦編 1996 『御用地遺跡』安城市教育委員会

加藤安信ほか 1993 『東光寺遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第42集

川合 剛ほか 2013 『新修豊田市史 18 資料編 考古1 旧石器・縄文』豊田市

川崎みどり編 2009 『堀内貝塚』安城市教育委員会

川添和暁編 2001 『牛牧遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第95集

川添和暁編 2005 『上品野遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第132集

川添和暁編 2009 『大坪西遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第157集

川添和暁 2013 「馬見塚遺跡の石器について」『縄文から弥生へ—馬見塚遺跡の時代—

平成25年度一宮市博物館特別展示図録24～29頁

川添和暁 2016 「笹平遺跡の発掘調査」『平成27年度 設楽ダム関連発掘調査成果報告会 新設案発見伝2 配布資料』16～31頁 愛知県埋蔵文化財センター

黒田健二・岩瀬彰利ほか 1998 『観音前遺跡発掘調査報告書』新城市教育委員会

佐藤睦信編 1983 『日影平』長野県下伊那郡根羽村教育委員会

杉崎 章ほか 1965 『宮西貝塚』東浦町教育委員会

武部真木編 2003 『八王子遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第112集

永井宏幸編 2004 『吉野遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第125集

原田 幹編 1995 『川地遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第62集

樋上 昇編 2015 『石岸遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第195集

前田清彦編 1993 『麻生田大橋遺跡発掘調査報告書』豊川市教育委員会

松田 訓編 1992 『上の平遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第41集

松田典人 1983 『道下』上矢作町教育委員会

松井直樹 2003 『八王子貝塚IV』西尾市埋蔵文化財調査報告書第12集

松井直樹 2007 『枯木宮貝塚III』西尾市埋蔵文化財調査報告書第17集

安井俊則編 1991 『麻生田大橋遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第21集

山下勝年編 1989 『神明社貝塚』南知多町教育委員会

余合明彦編 1993 「三斗目遺跡・三本松遺跡」愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第47集

渡辺 誠 2002 「正林寺貝塚」『愛知県史 資料編1 考古1 旧石器・縄文』426～427頁 愛知県